

國學院大學學術情報リポジトリ

令和5年 大学院国際交流旅費補助による出張報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000349

令和5年 大学院国際交流旅費補助による出張報告

◇学会出席・発表目的による出張者（1～3）

掲載順	出張者	出張期間	出張先
1	出口 颯涼 (博士後期課程1年)	令和5年8月16日～令和5年8月27日	ゲント大学、ルーヴェン大学（ベルギー）
2	佐藤 友美 (博士前期課程2年)	令和5年8月16日～令和5年8月27日	ゲント大学、ルーヴェン大学（ベルギー）
3	孫 政政 (大学院特別研究員)	令和5年8月28日～令和5年9月4日	オーストラリア・シドニー

◇研究調査目的による出張者（4～6）

掲載順	出張者	出張期間	出張先
4	富田 綾美 (博士前期課程1年)	令和5年8月5日～令和5年9月3日	台湾・台南市及び高雄市
5	禰島 真帆 (博士前期課程1年)	令和5年9月1日～令和5年9月11日	アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島ワイキキ周辺
6	本美 里紗子 (博士後期課程1年)	令和5年9月18日～令和5年9月22日	ロンドン（テート・ブリテン他）

【1】 出口 颯涼

〔出張期間〕 令和5年8月16日（水）～令和5年8月27日（日）

〔出張先〕（国／地域・都市等詳細）ベルギー／ゲント、ルーヴェン、ブリュッセル
ルーヴァン＝ラ＝ヌーヴ、ドイツ／ケルン、ボン

〔学会名称、調査地の地名・施設名等〕 EAJJS（ゲント大学）、2023年度ルーヴェン大学・
國學院大學国際学術プログラム（KU Leuven）、UCLouvain（ルーヴァン＝ラ＝ヌーヴ）、
ゲント市立博物館・精神医療博物館（ゲント）、ケルン大聖堂宝物館・ケルン市立東洋美
術館（ケルン）、ライン州立博物館（ボン）、ブリュッセル市立博物館（ブリュッセル）

〔報告事項〕

今回の出張では、①ゲント大学にて8月17日から20日まで開催された EAJJS（ヨーロ
ッパ日本研究協会）への参加、②8月22日に KU Leuven にて実施された2023年度ルーヴェ
ン大学・國學院大學国際学術プログラムでの報告、③ルーヴァン＝ラ＝ヌーヴの
UCLouvain 図書館（ベルギー）、ゲント・ブリュッセル（ベルギー）、ケルン（ドイツ）
にある博物館にて調査を行った。

①については、近代政治、選挙政治などのセッションで報告を聞いた。日本研究者がヨー
ロッパに一堂に会する EAJJS では、英語を用いて研究報告が行われる。英語による研究報
告を聞いたのは初めてであり、報告終了後の疲労感や日本語の研究報告を聞く以上のもの
であった。とはいえ、英語での研究報告・質疑応答は、日本語を話すことができない研究
者にも研究成果を伝え、意見交換をできる貴重な機会である。EAJJS への参加を
通して、研究をより良いものにするために、海外の学会において英語での研究報告に挑戦
したいと思った。また、日本ではあまり見られない研究手法・分析視角による報告も聞く
ことができ、勉強になった。他にも、英語での研究報告のやり方や、報告中に身振り手振
り交えるなどの工夫、聞き手が理解しやすいパワーポイントの見せ方など、報告の手法で
も参考にすべき点が多くあった。②に関しては、「18～20世紀日本の政治文化・美術・宗教」
というテーマのもと、ルーヴェン大学と國學院大學の先生・院生が研究報告をした。報告
者は、Elections and Buddhism in modern Japan（「近代日本の選挙と仏教」）という題目
で、英語による研究報告をした。報告内容は、現代日本の宗教と政治の関係を皮切りに、
明治期に僧侶に参政権は付与されず、大正期の僧侶参政権運動を経て参政権が付与された
こと、そして、博士論文にて取り組んでいる参政権獲得後から昭和戦前期の仏教界の選挙
活動についての報告をした。慣れない英語での研究報告に苦戦するも、報告後はルーヴェ
ン大学の先生方などから数多くの貴重なコメントを頂戴した。報告終了後は、ルーヴェン

大学の先生・院生による研究報告を聞いた。研究報告では史料分析の手法や、ヨーロッパから日本の史料を収集する方法など、数多くの点で参考になった。プログラム後にはルーヴェン大学の日本学科の院生と交流をした。③については、日本からルーヴェン大学に寄贈された、UCLouvain 図書館の貴重コレクションを閲覧した。また、博物館は、ゲントではゲント市立博物館と精神医療博物館に、ケルンではケルン市立東洋美術館と、ケルン大聖堂の地下にある宝物館に、ブリュッセルではブリュッセル市立博物館などに訪れた。ゲントは中世に栄えた古都であり、ゲント市立博物館は古代・中世における都市ゲントの発展の様子がよく分かる展示内容であった。精神医療博物館は、ベルギーの医師で精神医学の先駆者であるジョセフ・ギスランと、精神医療患者にまつわる展示がされている。患者の写真や患者が描いた絵などといった展示からは、社会は精神医療患者をどのように捉えていくのかという強いメッセージ性を感じた。このような、来訪者に特定のメッセージを訴えかける展示手法は、災害や戦争などの展示にも応用ができるのではないと思った。ケルン大聖堂の宝物館では、剣や石像など、西洋のキリスト教文化が強く表れた多くの資料を見ることができた。今回の出張ではケルン大聖堂以外にも、ベルギーの大聖堂などを訪れ、そこで見た石像・壁画、聖堂を中心に形成される街並みからは、キリスト教の文化的影響力の強さを感じ、日本との違いを改めて感じた。ケルン市立東洋美術館は東アジアの書画や陶器などが展示されている。日本に関する展示品は、浮世絵や仏像、薩摩焼などであった。妖怪や幽霊などはキリスト教文化にとっては異質なものである。また、仏教・神道とキリスト教では死後の世界観も違う。こうしたアジア的宗教文化とキリスト教的文化との違いを来訪者が理解できるよう、キャプションなども工夫し、仏教関係や妖怪の浮世絵などの資料を効果的に展示していたと考える。ブリュッセル市立博物館では、企画展のエジプト展のみ見た。日本の博物館のエジプト展では、ツタンカーメンやアヌビスなどの古代エジプト資料が大きな比重を占めている。ところが、ブリュッセル市立博物館は、古代エジプト資料だけでなく、遺跡を発掘した人物や遺跡発掘時の写真を展示していた。博物館のエジプトに関する展示で目にする資料がいかにして発掘されたのかがよく分かる展示内容であった。

以上の出張を通して、今後の研究生生活において大きな財産となり得る経験をたくさん得ることができた。主にベルギーで過ごした約2週間の期間に、ヨーロッパ流のコミュニケーションを体験し、異文化交流の大切さを学んだ。また、ヨーロッパで触れた「日本」は、報告者が余り感じなかったもの、初めて知ったものも少なくなかった。そして、ヨーロッパには日本に興味・関心を抱く研究者が多くいることを目の当たりにした。ヨーロッパの研究者・院生は、目を輝かせながら日本のことや研究のことを質問したり話したりした。

そして、その交流から「日本」を再発見することもたくさんあった。今回の出張により、これまで見た・聞いた・感じた「日本」と、ヨーロッパで新たに見た・聞いた・感じた「日本」を上手く融合し、「日本」をもっと理解して、国内外に発信できるような研究者になりたいと、今回の出張を通して強く思うようになった。それを実現するには、研究を一層進めるとともに、語学能力の向上が必要である。今後精進したい。

【2】佐藤 友美

〔出張期間〕 令和5年8月16日（水）～令和5年8月27日（日）

〔出張先〕（国／地域・都市等詳細）ベルギー／アントワープ・ルーヴェン・ブリュッセル、ドイツ／ケルン・ボン

〔学会名称、調査地の地名・施設名等〕EAJS、2023年度 ルーヴェン大学・國學院大学国際学術交流プログラム、UCLouvain、ゲント市立博物館、ゲント美術館、ギスラン博物館、ケルン大聖堂・宝物館、ケルン市立東洋美術館、ライン州立博物館、ブリュッセル市立博物館

〔報告事項〕

今回の出張では、1. EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）への参加・聴講、2. 2023年度ルーヴェン大学・國學院大学国際学術交流プログラムでの報告、3. 各地での調査を行った。

1. EAJS への参加・聴講

EAJS は、ゲント大学において8月17日から20日まで行われた。私は、明治維新や、幕末・明治期の史料調査結果などのセクションの報告を聞いた。英語の報告を聞く経験ができたほか、日本における日本史研究とは異なる、海外における幕末維新时期研究の視野や研究方法を知ることができた。また、当学会のイベントとして着物の展覧会も行っていた。正しい着方だけではなく、レースや洋服とあわせて着るような最近の着方の展示もしており、日本で見る着物の展示よりも、着物自体に親しみやすいものであった。

2. 2023年度ルーヴェン大学・國學院大学国際学術交流プログラムでの報告

本プログラムでは、「幕末維新时期から明治期における敗者の精神」(*The "mentalités" of the losers' from the end of the Edo period to the Meiji period*) というタイトルで、英語で報告を行った。母国語以外での報告であったため、通常の報告の準備よりも時間がかかっ

たが、海外での報告という貴重な経験を得られた。私はレジュメを見ながら話すだけで精一杯であったが、報告を行ったルーヴェン大学の院生からは、報告時の振舞いについて多くを学ばせていただいた。特に、身振り手振りやパワーポイントの有効的な活用方法はぜひとも今後に活かしていきたいと思う。また、交流を通して、ルーヴェン大学の先生や院生・学生から多くのアドバイスをいただくことができたので、今後の研究に積極的に活かしていきたい。

3. 各地での調査

UCLouvain 図書館では、日本からルーヴェン大学に寄贈されたコレクションを実際に見せていただいた。刊本がメインであったが、先生方に扱い方や調査の仕方などをきちんと教えていただけるありがたい機会であった。

アントワープでは、アントワープ市立博物館、アントワープ美術館、ギズラン博物館を実見した。アントワープ市立博物館では、アントワープの変遷についての展示を行っているほか、復元した修道院の長い歴史を10分ほどの動画でわかりやすく流しており、アントワープの歴史も深く学ぶことができた。

アントワープ美術館では、現在「アントワープの祭壇画」の修復をガラス越しに行っており、詳しい修復の様子を見学することができた。

ギズラン博物館では、ギズラン博士の精神医療に関する展示を行っていた。患者の写真や治療に使った器具などが並んでおり、今まで接することのなかった研究分野の様相を目の当たりにした。現在も患者がおり、彼らの描いた絵画なども飾っていた。なお、アントワープ全体を通して、街中の家の外壁や角にマリアや聖母子像があり、キリスト教文化の名残を感じた。当時と現代の信仰やその方法の違いについてなど、気になる課題も見つけることができた。

ドイツでは、ケルン大聖堂及びその宝物館、ケルン市立東洋美術館、ライン州立博物館を見学した。ケルン大聖堂では、外観や内装、きらびやかな宝物から、教会側の歴史を学ぶことができた。また、信徒が、十字架から降ろされたイエスの像の前で地に頭をついて拝礼したり、聖水を頭にかけたりするなど、日本ではキリスト教徒でないと見るのが難しい信仰の場を実際に目にすることが叶った。

ケルン市立東洋美術館では、日本・中国・韓国の美術品を展示していた。ドイツ語と英語で書かれた解説パネルから、東洋の美術品がどのようにヨーロッパに受け入れられているのか知ることができた。今後も、ヨーロッパでの日本・日本文化の捉えられ方、および日本でのヨーロッパ・ヨーロッパ文化の捉えられ方を注意して見ていきたい。

ライン州立博物館では、ラインの変遷だけではなく、発見された骨などから人間の進化

について知ることができた。中でも、当時の方法で石を削る15分ほどの映像があったが、非常にわかりやすく、自分の専攻ではない分野についても学ぶことができた。

ブリュッセルでは、ブリュッセル市立博物館の常設展を観覧した。キリスト教美術を中心に見たが、聖母子像の変遷などを肌で感じる事ができた。

小括

この出張を通して、日本では見られないキリスト教文化やその名残を、街並みや美術、信仰という形からうかがうことができた。明治期日本のキリスト教徒の信仰を知るうえでのヒントも数多くあったので、ぜひ研究に活かしていきたい。また、外国語を自主的に学んでいたが、交流プログラムをはじめ、コミュニケーションをとる際にとても役に立った。今後も研究に加えて外国語を勉強し続けていきたい。

【3】 孫 政政

〔出張期間〕 令和5年8月28日（月）～令和5年9月4日（月）

〔出張先〕（国／地域・都市等詳細） オーストラリア・シドニー

〔学会名称、調査地の地名・施設名等〕 JSAA-ICNTJ2023 豪州日本研究学会研究大会 / 国際繫生語大会

〔報告事項〕

JSAA-ICNTJ2023 は日本研究と関連の各分野、そして、繫生語／継承語に関わる研究者、践者が世界各国からオーストラリア、シドニーの地に会し、対話する場を提供する大会である。学会のテーマであるポストコロナにおける「ヒト」「ことば」「モノ」「情報」などの移動、越境、融合、そして社会の多様性と動態性を批判的に考察し、新しい切り口からグローバリゼーションおよび脱植民地化とはなにかを見直すことによって、日本（語）研究の展望について考える機会である。また、豪州日本研究学会と国際繫生語大会を同時に開催することにより、日本研究と日本語関係の研究の越境、融合をも試みた。厳しいロックダウンを経験したオーストラリアの地で日本研究者が4年ぶりに対面で交流することによって、また、世界各国の繫生語／継承語としての日本語教育、日本国内に在住する外国ルーツの子どもたちの日本語及び母語教育などに関わる実践事例や研究の発信を通して、日本研究、日本語コミュニティのネットワークの強化を目指す。開催地であるシドニーの補習校の訪問や、繫生語／継承語話者・学習者主導のイベント、多言語・多文化景観が顕在化するシドニーの街をローカルの視点から紹介する「街を歩く」企画などを盛り込ん

でいる。多様性と動態性を「現場」を通して肌で感じながら理論と実践をつなげた議論を展開する場を提供する。

今回の開催地はオーストラリアのシドニーで、ニューサウスウェールズ大学、シドニー工科大学、シドニー大学の三つの大学で行われた。世界トップ大学のアカデミックな雰囲気にも包まれながら、有意義な議論を交わすことができた。中で最も印象深い発表は「大学初年次の留学生の、母語話者との共通履修科目における理解度はどのように認識されているのかー留学生と教員へのインタビューに見られる認識の齟齬ー」であった。この発表では、留学生と教員が初年次の授業の理解という目標の達成度を遠隔授業と対面授業においてどのように認識しているかを明らかにすることが目的であった。調査の対象となる授業は、「日本語で開講されており、母語話者教員・非母語話者教員が担当し、母語話者学生と留学生が共通して履修する科目」である。首都圏のA大学の法学部初年次基礎演習および専門科目における教員4名と留学生5名を対象に、「授業の理解度の判断とそれを支える意識」について半構造化インタビューを行った。初年次の授業形態は、「遠隔授業・講義形式・オンデマンド型」「遠隔授業・講義形式・双方向型」「対面授業・講義形式」「対面授業・グループワーク形式」の4つである。インタビューの結果、留学生は、遠隔授業における理解度に関しては、双方向型より視聴が複数回可能なオンデマンド型への評価が高かった。教員への質問はインターネットによる学習管理システムの利用で行えるため、双方向型への期待は低かった。また、「対面授業・講義形式」は、他の3つの授業形態と比較すると理解が最も難しく、「対面授業・グループワーク形式」は、言語的、非言語的な方法による意思疎通の容易さと、教員からのフィードバックが即時に受けられる点から理解が最も容易であると認識されていた。一方、教員は、理解度を試験とレポート提出にもとづく成績評価結果から判断しており、母語話者学生と留学生との成績に顕著な差が見られなければ、十分に理解していると認識していた。しかしながら、「対面授業・講義形式」「対面授業・グループワーク形式」では、出席率が高く協働活動にも積極的であるにもかかわらず課題の提出が不十分という、授業への参加態度と成績とが一致しない事例があった。このように、留学生においては対面授業の双方向性によって得られる満足度が理解度の高さとして認識される傾向が高い一方、成績評価結果による教員の理解度の認識は、留学生の認識と異なる場合があることが明らかになった。今回のインタビュー調査対象者である留学生は中国からの留学生であり、私は普段中国人留学生を教えているため、留学生のさまざまな事情を把握しており、教育経験からも非常に納得のできる調査結果であると考えている。また、発表者の佐野先生と近藤先生とも意見を交わすことができ、親交を深め、非常に勉強にもなった。私は教育者でありながら、日本語学習者でもあり、私自身の学習

経験を共有することもできた。大変有意義な学術会議に参加することができた。

今回のオーストラリアの学会に参加できたのはすべて國學院大學大学院国外旅費補助金のおかげである。謹んで感謝を申し上げる。

【4】富田 綾美

〔出張期間〕令和5年8月5日（土）～令和5年9月3日（日）

〔出張先〕（国／地域・都市等詳細）台湾・台南市及び高雄市

〔学会名称、調査地の地名・施設名等〕大原生命禮儀社等

〔報告事項〕

令和5年度大学院国際交流旅費補助を活用し、台湾南部台南地域において現地調査を行ったため以下のとおり報告する。

調査期間は8月5日から9月3日まで、調査対象は台南地域で道士が行う道教儀礼及びその周辺に見られる現地の習俗である。筆者は2018年から継続してこの地域で調査を行っており、今回の調査も懇意の道士に依頼し、彼の仕事を主に見学した。

今回調査することのできた事例は以下のとおりである。

【喪事】

入殮1件（8月21日）、頭七4件（8月9、18、22日、9月1日）、尾旬6件（一朝1件（8月15日）、午夜1件（8月12日）、打城填庫4件（8月18、21、22、27））、出殯5件（8月6、17、18、19、22日）、樹木葬1件（8月19日）、看塔位2件（8月9、27日）、対年合炉2件（8月6、17日）、南路（高雄）の道士が行う尾旬2件（午夜1件（8月10日）、懺功德1件（8月7日）

【旧暦7月の行事】

功德（死者供養）2件（三朝1件（8月23～26日）、一天1件（8月20日））、中元醮1件（8月29日）、普渡4件（8月27、28、30、9月1日）

【その他】

慶成醮2件（8月13、13～14日）、起土1件（8月10日）

まず喪事についてであるが、台南地域では死後7日から10日程度経たのちに火葬を行うことが多く、その中で死者供養の儀礼等が行われる。多くの道士は日常的には喪事に関わる仕事を行っており、そのため筆者が今回調査し得た事例も喪事が最も多い。

各事例の内容を順を追って説明すると、入殮（納棺）の1件は、台南市立南区殯儀館（葬儀場）で行われたものである。殯儀館で行われる入殮を調査したのは初めてであり、入殮室で入殮を行った後、道士の先導で靈堂（殯及び小規模な死者供養の儀礼等を行う空間）に移動する過程等が観察できたことが興味深かった。また、別日ではあるが、入殮前の遺体を安置する部屋にも立ち入ることができ、殯儀館における遺体の動きがより明確になった。

頭七は死後七日目の行事であり、誦経等が行われる。今回観察した事例は全て南區殯儀館におけるものであった。

尾旬は七七日（実際は49日を待たずに行う）のことであり、台南地域ではこの日に最も盛大な死者救済の儀礼を行う。これは様々な規模で行われ、今回筆者は一朝（約1日、夕食後の時間まで）、午夜（本来夕方から夜だが、現在は朝から夕方までの時間）、打城填庫（打城（地獄の城を破る）と填庫（遺族が死者のために庫銭焼き納める）のみを行う小規模な儀礼）の三種を調査することができた。このうち一朝は今回初めて見ることであったものであり、これまでに聞き取りで得た知識を事例で補完することができた。また、打城填庫のうち8月22日に行われた事例では、旧暦七月の習俗の関係で填庫が旧暦六月中に済まされており、小規模な儀礼中にも興味深い点は多い。

出殯は、ここでは告別式、火葬、進塔（納骨塔へ納める）等の一連の行事を指すこととする。今回は、南區殯儀館と高雄市第二殯儀館橋頭分館（以下「橋頭殯儀館」という）で行われたものを観察することができた。告別式の部分では、前回の調査から装飾にはいくらか変化が見られたが（入口に孝獅を一對置く等）、概ね以前と同様に行われていた。火葬および撿骨（骨上げ）では、今回初めて骨壺へお骨を収める過程を間近で観察することができた。進塔では、夫婦の遺骨を隣りあわせに収めるため、既に別のところに安置されていた骨壺を移動する事例を観察することができた。筆者は以前、夫婦の一方の納骨位置を決める際に、その隣を予約する事例を観察しており、両者の違いが金銭面にあるのか納骨塔の規定によるものか、今後機会を探り確認してみたいと考えている。

樹木葬とは火葬後の遺骨の納め方の一種であるが、この事例では火葬場での遺骨の受取りから埋葬までの部分のみに道士が関わった。これは、この事例の死者が生後数日で亡くなった嬰兒であったためと思われる。しかし、それでもなお、遺骨の移動と埋葬の部分には道士が関与すべきと考えられていることは興味深い。樹木葬自体は近年件数が増えているようであり、今回筆者が調査した出殯のうち一件も樹木葬であった。なお、南區殯儀館等の掲示によれば、市政府は海葬を推薦しており、これらの新たな死者の葬り方がどのように受け入れられるのか、今後とも注視したい。

看塔位とは納骨位置を決めるものであり、道士等風水を見られる者が遺族に付き添って決める。対年合炉は死後1年を経て、新死者の位牌と香炉を先祖のものに合わせる儀礼である。今年は閏2月があったため、満12か月、すなわち死亡した月日とは異なる日付で対年を行うものを観察することができた。

また、今回の大きな成果として、道士の紹介で高雄地域の道士が行う尾旬の儀礼を2件観察することができた。その際使用された科儀書等も一部記録することができたため、今後内容を検討していきたい。

次に旧暦7月の行事であるが、この月は鬼月とも呼ばれ、祀られない靈魂（鬼、好兄弟）が地上をうろつくとされているため、様々な特殊な習俗がある。道教儀礼の研究を行う筆者にとっては、三朝（約3日間）の功德が調査できたことが大きい。この規模の儀礼は通常の死者供養では減多に行われなため、こうした機会は貴重である。

その他に挙げた慶成醮は、自宅や店舗の新築改装時に行う厄払いの儀礼である。起土は、新たに建築を始める前の土地の厄払いである。いずれも旧暦6月末に行われたものであり、旧暦7月に入る前に行う必要があったものと思われる。

今回はコロナ禍を経て3年ぶりの調査であったが、現地の関係者から以前と変わらず多大な協力をいただくことができ、非常に充実した調査となった。この場を借りてお礼申し上げる。

【5】 彌島 眞帆

〔出張期間〕 令和5年9月1日（金）～令和5年9月11日（火）

〔出張先〕 〔国／地域・都市等詳細〕 アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島ワイキキ周辺

〔学会名称、調査地の地名・施設名等〕 Hamilton Library・Japanese Culture Center・Okinawa Center・Hawaii Convention Center

〔報告事項〕

9月1日―11日の10日間、ハワイ日系移民史のフィールドワークのためハワイ州オアフ島を訪れた。主な調査目的は、日系人コミュニティの現状調査、日系人コミュニティの方へのインタビュー、史料収集、史跡訪問である。私の研究テーマは主に第二次世界大戦前、ハワイ日系移民における日本語学校と二世兵の関係性である。調査日程表は以下の通りである。また今回の調査旅行に際し、Nisei Veterans Legacy 副会長の Mr. Byrnes Yamashita に大変お世話になった。すべてのアポイントメントや日程調整にご協力いただき心から感謝を申し上げたい。

今回の調査旅行の中で特に印象深かった事柄を取り上げる。

1. 9/2-9/3 OKINAWAN FESTIVAL
2. 9/7-9/8 Japan Special Collection at Hamilton Library of University of Hawaii
3. Interview:「沖縄県人会の継承活動」「二世部隊コミュニティの目的」

1. 9/2-9/3 OKINAWAN FESTIVAL

OKINAWAN FESTIVAL とは、年に1度 HUOA (Hawaii United Okinawa Association) 主催で行われるお祭りである。Hawaii Convention Center を会場に Eating-Shopping、Playing・Enjoying、Learning、Supporting エリアを設け、メインステージでは沖縄の伝統芸能が披露される。

ハワイの沖縄県出身の日系人人口は各県出身者と比較しても非常に多く、また HUOA と沖縄県との繋がりには戦後すぐから今日まで強く残っている。1日目のラストイベントは BON-DANCE である。神奈川県出身の私の知る盆踊りとは大きく異なった。会場の真ん中に旗を掲げ、その旗を中心にエイサー部隊が円になり、その外側に盆ダンス参加者が並ぶ。沖縄の音楽と共に盆ダンスは始まり、30分もしないうちにその輪はとても大きくなった。老若男女に関わらず多くの人が沖縄の音楽と踊りを楽しむ様子が印象的だった。OKINAWAN FESTIVAL はハワイで行われるお祭りの中でも最大規模だが、ハワイでは盆踊りが頻繁に行われ、ハワイの日系人に親しまれた文化になっている。Learning エリアは、沖縄の文化を紹介しているコーナー、ひめゆりの歴史展示や沖縄県人のルーツについて (OKINAWAN DNA) の展示などがあり、来場者の出自を辿ることのできるブースもあった。

OKINAWAN FESTIVAL の来場者数は二日間で合計55,000人。日本の NHK でも祭りの様子は放映された。沖縄の文化・歴史継承を FESTIVAL という多くの人が参加しやすいイベントによって体現化し、OKINAWA 日系人コミュニティの存続に大きな役割を担っている。

2. 9/7-9/8 Japan Special Collection at Hamilton Library of University of Hawaii

ハワイ大学マノア校にあるハミルトン・ライブラリーには600を超える日本語学校教科書が所蔵されている。日本研究司書中村充孝氏のご配慮により、太平洋戦争以前からのハワイ日本語学校の修身教科書を中心に閲覧・複写することができた。教師用修身教科書や教科書内のメモ書き、戦後の修身教育について議論された議事録が見つかり、大変有意義

な史料収集となった。特に修身という教科がハワイで戦後どのように扱われてきたのか、これまで日米戦争を区切りに研究してきた私にとって非常に興味深いものであった。OKINAWAN FESTIVAL で出会った方々を始め多くの方が口にしていた「日本人の心と教え」の継承において、戦後も続いた修身教育は関係しているのか検討する必要があると思われた。また日本語学校の記念誌や卒業アルバムは当時の日本語学校の様子や生徒の生活の様子を確認できる重要な史料である。生徒の書いた文集は見事な日本語であり、当時の日本語学校の教育レベルの高さを知ることができた。今回入手した一次史料を今後の研究に大いに役立てたい。

3. Interview

今回のフィールドワークでは13名の方にインタビューをすることが実現した。インタビューにご協力いただいた皆様に感謝申し上げたい。特に印象深かったエピソードを紹介したい。

○ Mr. Byrnes Yamashita (Hawaii United Okinawa Association・Nisei Veterans Legacy)

HUOA (Hawaii united Okinawa Association) では次世代メンバーの育成に力を入れている。他の多くの県人会ではメンバーの半数以上を高齢者が占め、若者の会員が少ないことが課題となっている。HUOA はその課題に対し、2歳から HUOA で沖縄の踊りなどを習い、少し大きくなると次に三線などを始める。高校生大学生になると、沖縄へ1～2年の民家へのホームステイができるようシステム化されている。大人になった時には、HUOA の活動が人生の一部になっており若いメンバーが中心となって HUOA を引っ張って行くことになる。

多くの県人会幹部は3世や4世が多く、戦後アメリカナイズेशनが加速した現代社会を生きる5世・6世を日系人コミュニティの活動に巻き込むことは困難になっているという。HUOA の確立したメンバー育成システムは今後の日系人社会存続の鍵になるであろう。

○ Mrs. Janice Sakoda, President and Ms. Kathleen Hayashi (100th Infantry Battalion Clubhouse)

100th Infantry Battalion Clubhouse とは、第二次世界大戦時に活躍した二世部隊が戦時中に形成した同士の絆や繋りを継続させるため二世部隊により作られたクラブハウスである。戦時中毎月の給料から2ドルずつ集金し、1952年にクラブハウスは完成。退役軍人と

その家族が集まれる場所として使用されてきた。

彼女たちは自分たちの活動について二世兵を成功に導いた価値観（我慢、恥、忍耐力、家族）を次世代の人々はどのように受け止めるのかが大切だと話した。100th Infantry Battalion Clubhouse は、今の学生たちが力を入れていることを応援し、彼らが第百大隊の価値観を学ぶことでさらなる成長を見出すように働きかけている。また、現在彼女たちは二世部隊のオーラル・ヒストリーや写真などの記録をデジタル・ライブラリー化する活動を主目的として活動している。一般的なアメリカの公立学校では日系アメリカ人部隊についての歴史を習うことはないので、彼らの戦中戦後の功績を後世に残す役割を100 Club House が担っている。

結 語

10日間で多くの方にお話し伺うことができ、ハワイ日系人コミュニティの規模と築かれてきた歴史、次世代への継承の取り組みを学んだ。ハワイ日系コミュニティは今の日本の文化を真似るのではなく、一世や二世が造ったハワイ日系人の文化を残すことであった。一世が明治時代にハワイに持ってきた文化を残すため努力し続け100年以上の月日が流れていることに日本人として感心するばかりであった。

またハワイに残されたハワイ日系人関連史料は日本では確認できない物も非常に多い。ハワイ日系移民史の研究発展には日布間の交流関係が欠かせない。10日間本当に多くの方々にご協力いただきフィールドワークが実現した。お忙しい中インタビューに応じていただいた皆様、特にフィールドワークの計画から全日程の案内まで全て行っていたいただいた Mr. Byrnes Yamashita に心よりお礼を申し上げたい。

Summary in English

Under mentioned is the real tight schedule in Hawaii attending various meetings, events, festivals, interviews, all of which were produced by Japanese Hawaiian chairpersons for my reserch activities.

From September 1 to 11, I visited Oahu, Hawaii for fieldwork on Japanese American History of Hawaii. The main purposes of my research trip were to survey the current status of the Nikkei community by interviews, collecting materials, and visiting historical sites. My research interest is mainly on the relationship between Japanese

language Schools and Nisei soldiers in Hawaii before World War II.

Mr. Byrnes Yamashita, the vice president of Nisei Veterans Legacy, gave me great help during this research trip. I would like to express my appreciation for his cooperation in arranging all appointments and schedules.

1. 9/2-9/3 OKINAWAN FESTIVAL

OKINAWAN FESTIVAL is an annual festival by HUOA (Hawaii United Okinawa Association). Okinawan traditional performing arts were held on the main stage which was reported by NHK TV in Japan. As mentioned in the above, this festival size and its influential power is exceptionally so big that quite a few Hawaiian dignitaries attended. Okinawan Nikkei enjoyed Okinawan music and foods, viewed exhibits on Okinawan history, and researched their origins. OKINAWAN FESTIVAL is the biggest festival in the Nikkei community in Hawaii. The last big event on the first day is Bon-Dance. In Hawaii, people dance Bon-Dance many times a year at which I was very much surprised. But I understood when I heard how often the festival is held in Hawaii. They are more passionate about festivals and Bon-Dance than Japanese people. The OKINAWAN FESTIVAL is a great opportunity to learn about their roots and cultures for children, because the festival is participation type and can be enjoyed with their family and friends.

2. 9/7-/9/8 Japan Special Collection at Hamilton Library of University of Hawaii

The Hamilton Library of University of Hawaii has a Japanese Special Collection. Thanks to Mr. Mitsutaka Nakamura, Japan Studies Librarian, I was able to see so many historical materials related to Japanese Language School in Hawaii before and after WW II . I appreciate Mr. Nakamura's suggestion. Hamilton Library has precious materials of the Japanese Language School of Hawaii after the war. And they are all very precious materials for my research.

I was able to obtain materials on Shushin(修身) textbooks photocopies from Japanese language schools.

These documents caused several subjects to investigate. Why did Japanese language schools emphasize Shushin? Were the contents of the textbooks heavily influenced by

Inazo Nitobe's Bushido and Confucianism? Did the contents of Shushin textbooks differ depending on religion or school policy? The people I met on this research trip taught me the Japanese spirits. For example, On(恩), Shikata-ga-nai(仕方がない), Gaman(我慢), Giri(義理) and Koko(孝行). They cherish these “Kachikan” or sense of value from Japan. What is the relationship between present Japanese teaching method and shushin education in the old days? This needs to be examined in the future.

Hawaii has so many historical materials about Japanese American history. And their activities are amazing. As a researcher, I found much more energy is indispensable to tackle this subject.

3. Interviewing Mr. Byrnes Yamashita about activities of HUOA

He is also a member of HUOA. He invited me to the Okinawan Festival and its Aloha Party. And he taught me a lot about the Okinawan community in Hawaii. In recent years, many Nikkei communities are facing the problem of not having a younger generation. But HUOA is different.

In HUOA, they have established a system that they can learn to play Okinawan Sanshin or traditional dance of Okinawa when they were young. And they grow up to be high school or college students, they can do a homestay in Okinawa. So, the younger generation of HUOA can become its leaders very naturally.

This is a very good system to preserve their culture and identity. HUOA is the biggest Nikkei community in Hawaii. But it is very important for all Nikkei communities to keep the Nikkei culture and identity. Therefore, they need to share ways to pass it on to the next generation.

Conclusion

I visited the 100th Infantry Battalion Clubhouse and Punch Bowl Cemetery with Mr. B.Yamashita.

There I learned how many Japanese American soldiers sacrificed their lives for America and future generations. About 150 years ago, Japanese were sent to Hawaii as plantation laborers. Despite low wages, they worked like slaves. The birth of the Nisei provided them with educational opportunities and further development of the community. However, the U.S government did not recognize their political rights as the

Anglo-Saxons did. They tried to prove their rights and duties as American by becoming the volunteer soldiers. The Japanese American soldiers received the highest lank decorations and medals. The U.S government recognized them for their achievements, courage and great sacrifice. President Truman said Japanese American solders won not only the war, but also discrimination. The Nikkei community today benefits great from these achievements.

Today, however, American and Japanese children do not learn about Japanese American history in most schools. As a result, the Nikkei communities face problems inheritance on Nikkei history, culture, and identity to the next generation. Under the changing generations, how can people who are not war survivors pass on the history and identity of the Issei and Nisei?

I was able to learn about their activities and efforts to do so during this fieldwork. Before this research trip, I had only studied about their history prior to World War II, however, I realized that this history is certainly still going on today. After this, I would like to focus on their inheritance activities.

Mr. Byrnes Yamashita, Mr. Ryoji Koike, Mr. Cyrus Tamashiro, Mr. Nakasone Norman, HUOA members, Haneji Club members, Ms. Christine Kubota, Ms. Sheree Tamura, Prof. Sakuda of University of Hawaii West Oahu, Bishop Tanaka, Minister ishida of Tendai Mission, Mr. Wayne Miyao President of Honolulu-Hiroshima Kenjin-kai, Mr. Steven Teruya President of Honolulu Japanese Chamber of Commerce, JCCH, Mrs. Janice Sakoda President, Ms. Kathleen Hayashi of 100th Infantry Battalion Clubhouse, Mr. Mitsutaka Nakamura, Ms. Lynette Teruya of Hamilton Library, Ms. Summer Nakaishi of Hawaii Herald, Mr. Noriyoshi Kanaizumi of Hawaii Hochi(ハワイ報知), Dr. PhD. Kelli Nakamura of Kapiolani Community College, Miyagi Kenjin-kai members. Everyone I met this fieldwork has a great spirit for Nikkei community. I would like to thank them for their warm cooperation. And Hawaii and the Japanese people need to cooperate for further development.

Kindly reference is made to the itinerary attached.

ITINERARY 9/1-9/11, 2023

Maho Yajima

9/1 (Fri)	
10 : 30	HNL arrival
Afternoon	Meeting Mr. Byrnes Yamashita (Nisei Veterans Legacy vice President)
9/2 (Sat)	
10 : 00	Okinawan Festival (Hawaii Convention Center)
10 : 30	Interview at V.I.P booth. Ms. Christine Kubota, Ms. Sheree Tamura
11 : 45 – 16 : 15	Work at Haneji Club Yakitori Booth
17 : 30	Bon-odori
9/3 (Sun)	
	Okinawan Festival
9 : 00 – 11 : 30	Work at VIP booth,
TBD	Meeting with Okinawan Kenjin Kai members (Hawaii United Okinawa Association) . Meeting with Mr. Cyrus Tamashiro (past HUOA President) , young HUOA members.
9/4 (LaborDay)	
10 : 00	Meeting with Prof. Sakuda (Professor of international relations at University of Hawaii West Oahu) , also current UJSH President
17 : 30	Okinawa festival Aloha Party at Hawaii Okinawa Center
9/5 (Tue)	
	Visit Manoa Japanese Language School ・ ハワイ本派本願寺
	Visit Punch Bowl Cemetery
	Meeting ハワイ天台宗別院 Bishop Tanaka
11 : 30～	Lunch with Mr. Miyao, (President of Honolulu Hiroshima Kenjin Kai)
14 : 00～15 : 00	Meeting with Mr. Steven Teruya, (President of the Honolulu Japanese Chamber of Commerce)
	Visit Resource Center, JCCH (after HJCC meeting) .
9/6 (Wed)	
9 : 00～10 : 30	100 th Infantry Battalion Clubhouse : meeting with Mrs. Janice Sakoda, President and Ms. Kathleen Hayashi; tour facility
	Visit Makiki cemetery
	Visit Ehime Maru EHIME MARU MEMORIAL CEREMONY
13 : 15 – 14 : 15	Visit Iolani Palace for guided tour in Japanese.
9/7 (Thurs)	
9 : 00 – 10 : 00	Meeting with Ms. Summer Nakaishi (The Hawaii Herald writer)
10 : 00 – 11 : 00	Meeting with Mr. Noriyoshi Kanaizumi (editor of Hawaii Hochi)
	Research at Japan Special Collections of UH Hamilton Library. Meeting with Mr. Nakamura

18 : 00～	Dinner with Miyagi-kenjinkai
9/8 (Fri)	
9 : 00 - 10 : 00	Visit JCCH Historic Gallery
10 : 30 -	Meeting with Prof. Kelli Nakamura (Kapiolani Community College)
Rest of day	Hamilton Library
About 17 : 30	Attend University of Hawaii Volleyball match with Mr. Nakasone and students of UH master degree course.
9/9 (Sat)	
10 : 00 - 12 : 00	Visit Hawaii Plantation Village
	Visit USS Arizona Memorial
	Visit Chaina Town
9/10 (Sun)	
11 : 00 - 14 : 00	Sayonara/Aloha Luncheon; Natsunoya Teahouse
9/11 (Mon)	
14 : 45	HNL departure

【6】本美 里紗子

〔出張期間〕 令和5年9月18日（月）～令和5年9月22日（金）

〔出張先〕（国／地域・都市等詳細）イギリス

〔学会名称、調査地の地名・施設名等〕 ロンドン（テート・ブリテン他）

〔報告事項〕

助成者は本年度10月15日に開催された美学会若手研究者フォーラムにおいて、19世紀イギリスで活動したJ.W. ウォーターハウス（John William Waterhouse, 1849-1917）作《マリウムネ》（1887年、ジョン・シェファード・コレクション）にみられる白の色彩表現と、ウィルキー・コリンズ著『白衣の女』（1860年）との関連性を主眼とする口頭発表を行った。そのため本調査は学会発表前に、ウォーターハウスや同時代の画家の作品、そして画家の活動拠点であったロンドンを実見することを目的とした。ロンドンには1日目の夕方に到着するため、本格的に調査を開始したのは2日目からである。本調査の行程は以下の通りである。

【2日目】午前中は事前に予約をしたテート・ブリテンの収蔵庫で作品調査を行った。テート・ブリテンは2年前から収蔵庫で保管する2メートル近い作品の公開を行っていない。そのため本調査では《神託伺い》を鑑賞することは叶わなかったが、ウォーターハウスが本作の翌年に制作した《聖エウラリア》の習作（1885年頃）、そしてロイヤル・アカデミー会員のウィリアム・オーチャードソンによる《最初の雲》（1887年）を鑑賞することがで

きた。

《聖エウラリア》の習作はテート・ブリテンの Web サイトで見るとても小さく、エウラリアの右横に建物的一部分と思われる物体が描かれ、本作の油彩画とは異なる構成が他にも散見された。

それに対してオーチャードソン作《最初の雲》は、縦横共に1メートル前後ある大きな作品であった。本作は《マリウムネ》のように1887年のロイヤル・アカデミー展に出品されており、同年の展覧会を知るうえで重要な作品である。結婚生活の破綻を題材にした《最初の雲》は、白いドレスを身に纏い、夫に背を向けた妻の姿が印象に残る作品であった。

午後は大英博物館へ赴き、《マリウムネ》に描かれたとされるニフィ神殿入口の壁に施された獅子の浮彫（紀元前865-紀元前860年）を鑑賞した。獅子の浮彫りは縦2.59メートルの立像であるのに対して、《マリウムネ》にみられる獅子の場合は、階段の右端に鎮座しており大きさや仕草が異なる。しかしニフィ神殿の浮彫りのように、《マリウムネ》にみられる獅子も、牙を見せ威嚇をする表情や出入口に配置されている特徴が認められ、ウォーターハウスは法廷の守護神として獅子像を描いたと考えられる。

【3日目】午前中には1870年代後半からロイヤル・アカデミー・オブ・アーツの会長を務めたフレデリック・レイトンの邸宅を訪問した。現在はレイトンや同時代の画家の作品を展示する美術館になっており、1階にはオリエンタリズムの影響を受けた「アラブ・ホール」と呼ばれる荘厳な空間が広がっていた。ウォーターハウス作《マリウムネ》では、王妃の背後にアプシスが描かれており、「アラブ・ホール」と同様な室内構造をなしている。

そして2階にはレイトンの作品が展示されている傍らに、画家の書斎も現存していた。本棚にはロイヤル・アカデミーの初代会長であるジョシュア・レイノルズの著書から、イギリスの歴史作家アグネス・ストリックランド著『英国女王の生涯』まで多くの本が並んでおり、ヴィクトリア朝の貴重な一次資料を実見できた。

さらに、ロイヤル・アカデミー展において《マリウムネ》と同じ部屋で展示されたレイトン作《魔術師シマータ》のリトクラブもしくは写真が展示されていた。本作は『アカデミー・ノート』（1887年）に図版が掲載されているが所在不明であり、おそらく油彩画であったと考えられる。レイトン・ハウス版は複製作品だと思われるが、『アカデミー・ノート』の図版よりもシマータの表情や身に纏う衣装がより鮮明であったため、原画により忠実な描写を実見できた。

【4日目】最終日はロイヤル・アカデミー・オブ・アーツとナショナル・ギャラリーを訪問した。まず、ロイヤル・アカデミーの特別展ではレイノルズの自画像が展示されており、初代アカデミー会長としての威厳が表出していた。次に訪れたナショナル・ギャラリー

では西欧諸国の絵画が数多く展示されていたが、その中でもピーテル・パウル・ルーベンスの《青銅の蛇》(1635-40年)が傑出していた。本作は旧約聖書の『民族記』を典拠にしているが、躍動感のある身体表現もさることながら、画面右端で倒れた男性を抱える俯いた女性が印象に残った。女性の目頭と目尻に1点ずつ小さな白い顔料が塗布され、瞳から落ちる涙が輝いており、ルーベンスの卓越した色彩表現を垣間見ることができた。

本調査は短期間ではあったが、美学会の発表に繋がる充実した作品を鑑賞することができた。本調査で得られた情報と学会発表で寄せられた意見に加えて、《マリアムネ》にみられる色彩表現に言及した批評や、19世紀英国における文学を踏まえたうえで、『美学』に論文を投稿する予定である。